

**[B年] 聖霊降臨節第7主日(2022年7月17日)****【旧約聖書日課】 エレミヤ書 23章23～32節**

23 わたしはただ近くにいる神なのか、  
と主は言われる。

わたしは遠くからの神ではないのか。

24 誰かが隠れ場に身を隠したなら  
わたしは彼を見つけれないと言うのかと  
主は言われる。

天をも地をも、

わたしは満たしているではないかと

主は言われる。

25 わたしは、わが名によって偽りを預言する預言者たちが、「わたしは夢を見た、夢を見た」と言うのを聞いた。26 いつまで、彼らはこうなのか。偽りを預言し、自分の心が欺くままに預言する預言者たちは、27 互いに夢を解き明かして、わが民がわたしの名を忘れるように仕向ける。彼らの父祖たちがバアルのゆえにわたしの名を忘れたように。28 夢を見た預言者は夢を解き明かすがよい。しかし、わたしの言葉を受けた者は、忠実にわたしの言葉を語るがよい。

もみ殻と穀物が比べものになろうかと

主は言われる。

29 このように、わたしの言葉は火に似ていないか。岩を打ち砕く槌のようではないか、と主は言われる。

30 それゆえ、見よ、わたしは仲間どうしてわたしの言葉を盗み合う預言者たちに立ち向かう、と主は言われる。31 見よ、わたしは自分の舌先だけで、その言葉を「託宣」と称する預言者たちに立ち向かう、と主は言われる。32 見よ、わたしは偽りの夢を預言する者たちに立ち向かう、と主は言われる。彼らは、それを解き明かして、偽りと気まぐれをもってわが民を迷わせた。わたしは、彼らを遣わしたことも、彼らに命じたこともない。彼らはこの民に何の益ももたらさない、と主は言われる。

**【使徒書日課】 ガラテヤ書 5章2～11節**

2 ここで、わたしパウロはあなたがたに断言します。もし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方になります。3 割礼を受ける人すべてに、もう一度はっきり言いま

す。そういう人は律法全体を行う義務があるので。4 律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います。5 わたしたちは、義とされた者の希望が実現することを、「霊」により、信仰に基づいて切に待ち望んでいるのです。6 キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です。7 あなたがたは、よく走っていました。それなのに、いったいだれが邪魔をして真理に従わないようにさせたのですか。8 このような誘いは、あなたがたを召し出しておられる方からのものではありません。9 わずかなパン種が練り粉全体を膨らませるのです。10 あなたがたが決して別な考えを持つことはない、わたしは主をよりどころとしてあなたがたを信頼しています。あなたがたを惑わす者は、だれであろうと、裁きを受けます。11 兄弟たち、このわたしが、今なお割礼を宣べ伝えているとするならば、今なお迫害を受けているのは、なぜですか。そのようなことを宣べ伝えれば、十字架のつまずきもなくなっていたことでしょう。

**【福音書日課】 マルコによる福音書 8章14～21節**

14 弟子たちはパンを持って来るのを忘れ、舟の中には一つのパンしか持ち合わせていなかった。15 そのとき、イエスは、「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい」と戒められた。16 弟子たちは、これは自分たちがパンを持っていないからなのだ、と論じ合っていた。17 イエスはそれに気づいて言われた。「なぜ、パンを持っていないことで議論するのか。まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。18 目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか。19 わたしが五千人に五つのパンを裂いたとき、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」弟子たちは、「十二です」と言った。20 「七つのパンを四千人に裂いたときには、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」「七つです」と言うと、21 イエスは、「まだ悟らないのか」と言われた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## エレミヤ書 23章23～32節

23 私は近くにいる神なのか——主の仰せ。

私は遠くにいる神ではないのか。

24 人がひそかな所に身を隠したなら

私には見えないとしても言うのか

——主の仰せ。

天をも地をも、私は満たしているではないか

——主の仰せ。

25私の名で偽りを預言する預言者たちが、「私は夢を見た、私は夢を見た」と言うのを、私は聞いた。26偽りを預言する預言者たちの心に、いつまで偽りがあるのだろうか。彼らは自分の心の欺きを預言する者だ。27彼らの先祖がバアルのゆえに私の名を忘れたように、彼らは互いに自分の夢を語って、私の民に私の名を忘れさせようともくろんでいるのだ。28夢を見た預言者は夢を語るがよい。私の言葉を受けた者は私の言葉を真実をもって語らなければならない。

わらと穀物に何の関りがあるのか

——主の仰せ。

29 このように、私の言葉は火のようではないか

——主の仰せ。

また、岩を打ち砕く槌のようではないか。

30それゆえ、私は互いに私の言葉を盗み合う預言者たちに立ち向かう——主の仰せ。31私は自分たちの舌を用いて「仰せ」と告げる預言者たちに立ち向かう——主の仰せ。32今、私は偽りの夢を預言する者たちに立ち向かう——主の仰せ。彼らはそれを語り、偽りと気まぐれをもって私の民を惑わしている。私は彼らを遣わさず、彼らに命じもしなかった。彼らはこの民にとって何の役にも立たない——主の仰せ。

## ガラテヤ書 5章2～11節

2よく聞きなさい。私パウロがあなたがたに告げます。もし割礼を受けるなら、キリストはあなたがたにとって何の役にも立たなくなります。3割礼を受けるすべての人に証言しますが、そのような人には律法全体を行う義務があります。4律法によって義とされようとするなら、あなた

がたは、キリストとは無縁の者となり、恵みを失ってしまいます。5私たちは、霊により、信仰に基づいて義とされる希望を、心から待ち望んでいます。6キリスト・イエスにあっては、割礼の有無は問題ではなく、愛によって働く信仰こそが大事なのです。

7あなたがたはよく走っていたのに、誰が邪魔をして真理に従わないように勧めたのですか。8そのような勧めは、あなたがたを召し出しておられる方から出たものではありません。9僅かなパン種が生地全体を膨らませるのです。10私は主にあって、あなたがたが別な考えを持つことはないと確信しています。あなたがたをかき乱す者は、誰であろうと、裁きを受けます。11きょうだいたち、私が今なお割礼を宣べ伝えているとするなら、今なお迫害を受けているのは、なぜですか。割礼を宣べ伝えているなら、十字架のつまずきは無効になっていたもことでしょう。

## マルコによる福音書 8章14～21節

14弟子たちはパンを持って来るのを忘れ、舟の中には一つのパンしか持ち合わせがなかった。15その時、イエスは、「フェリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種に十分気をつけなさい」と戒められた。16そこで弟子たちは、パンを持っていないということで〔別訳→これは自分たちがパンを持っていないからだ〕、互いに議論し始めた。17イエスはそれに気付いて言われた。「なぜ、パンを持っていないことで〔別訳→パンを持っていないからだ〕議論しているのか。まだ、分からないのか。悟らないのか。心がたくなになっているのか。18目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか。19私が五千人に五つのパンを裂いたとき、集めたパン切れでいっぱいになった籠は、幾つあったか。」弟子たちは「十二です」と言った。20「七つのパンを四千人に裂いたときには、集めたパン切れでいっぱいになった籠は、幾つあったか。」「七つです」と言うと、21イエスは、「まだ悟らないのか」と言われた。

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・7月17日「聖霊降臨節第7主日」の日課主題は「パン種に注意せよ」。旧約においても、新約においても、神の言葉を教える者の「偽りの教え」と対峙している現実が描き出される。キリスト教会史において、それは「正統と異端」という図式で先鋭化されてきた歴史があるが、必ずしも教理上避けて通れない課題だけが扱われてきたわけではない。実際、「正統と異端」の構図は、キリスト教会がローマ帝国で公認宗教となり国教会化される過程で形成されてきた。教会が世俗権力との結びつきによって「正統と異端」の審判者としての権威を利用されてきたのである。翻って、現代の世俗化した世界において、世俗権力がキリスト教会に利用価値を見いださなくなる中で、諸教会間での「正統と異端」論争自体が無意味とみなされるようになってきていることを、よい意味で認めていくことが必要である。

・旧約聖書日課は、「エレミヤ書」から、偽預言者に対する警告を告げる預言の箇所から。使徒書日課は、「ガラテヤの信徒への手紙」から、パウロが対峙した「異なる福音」への傾倒に注意喚起し警告をする箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、パンの持ち合わせを気に病む弟子たちに対して、「パンの奇跡」の意味を悟るように促す箇所。

**旧約日課(エレミヤ 23 章より)**

・「エレミヤ書」は、ユダヤ正典「後の預言者」の第二に置かれた預言書で、「三大預言書」の一つ。預言者エレミヤの預言とその活動について伝えている。エレミヤは、もともとはベニヤミンの地アナトトに在する地方聖所の祭司の生まれであるが、前7世紀、南王国ヨシヤ王の時代に始められた改革の一環で地方聖所が中央聖所エルサレム神殿に統廃合される過程で、王宮付預言者としての地位を得た。南王国では、ソロモン王の建設した王立神殿に属する祭司団の中から王宮付預言者が王への助言者として任用されていたと考えられる。「預言者」は、もっぱら体制内に身を置く職位であった。それは、王宮政治における党派争いにも巻き込まれることを意味した。ヨシヤ王時代に王宮預言者に登用されたエレミヤは、ヨシヤ王の取った「反アッシリア・親バビロニア」の立ち位置で預言活動を行った。しかし、ヨシヤ王がエジプト軍との戦闘で戦死して以降、南王国王宮は、「親エジプト派」と「親バビロニア派」に二分され、激しく対立することになった。「親バビロニア派」のエレミヤは、「親エジプト派」の王宮主流派から排除されながらも、「預言者」としての地位から発言や政治活動を続け、それらの記録は王宮書記官バルクによって残されたのである。エレミヤは、エルサレムがバビロニア軍によって陥落し王国が滅びると、「親エジプト派」に人質として連行されるようにしてエジプトに行き、そこで生涯を閉じたと考えられる。

・エレミヤが対立した預言者として、具体的に「ハナンヤ」の名が知られている(28章)。ハナンヤは、王宮主流派に属する「親エジプト派」の預言者であったと考えられる。エレミヤの立場からすると、ハナンヤは「偽預言者」であり、日課箇所では挙げられている「偽りの預言者」の代表格である。結果として、エレミヤの「親バビロニア派」の立場からの預言どおり南王国はバビロニア軍によって滅ぼされてしまったということから、エレミヤの預言は、いわば歴史の検証に耐えた「真正」のもののみとみなされることになった。しかし、預言が語られた時点で、その預言が真正のものか、偽りのものかを判別する基準が示されうるのか、という問題が残る。日課箇所は、その基準として、「神の言葉」を忠実に語っているかどうか、という一点を見ている。「神の言葉」は、エレミヤが預言者として登用された「ヨシヤ王の改革」においては、「律法」の書に記された言葉に他ならない(王下 22 章)。そして、エレミヤの預言活動を継承し、バビロン捕囚後に「正典」編纂に取り組んだ者たちは、「律法」の書に即した「預言者」の書もまた「神の言葉」として認められ得るとして、「律法と預言者」を正典とする枠組みを提示することになったのであろう。「正典」的「神の言葉」の観念は、後のユダヤ教で強化され、キリスト教においても拡大された形で継承されているのである。

**使徒書日課(ガラテヤ 5 章より)**

・「ガラテヤの信徒への手紙」は、使徒パウロの「書簡集」に収められた書簡の一つ。パウロが、まだバルナバ宣教団の一員として活動していた時期に教会共同体形成に関わった「ガラテヤ地方の諸教会」に宛てて記された書簡で、バルナバ宣教団から分かれて独自の宣教団を組織して活動し始めた頃に執筆したものと考えられている。この時期、「教会」はいまだユダヤ教の枠組みの中での新しい「分派」として活動していたものであり、主流のユダヤ教会堂に比べて異邦人に対する門戸が格段に開かれたものとなっている点が特異的な「分派」であった。しかし、この異邦人受け入れに対する態度は、「分派」の中でも温度差があったと考えられ、よりユダヤ教主流に近い立場の者たちがエルサレムの共同体を中心に影響力を持っていた一方で、パウロらは徹底した開放を主導する立場を取っていた。要は、当時のローマ社会の中で独自の社会的立場を認められていた「ユダヤ人」共同体としての枠組みを「割礼と戒律遵守」によって保持する主流派の立場に対して、「分派」の中でもパウロら「異邦人伝道」派は、「割礼と戒律遵守」を異邦人に一切求めずに「洗礼」のみで共同体に受け入れることを推し進めていたのである。ガリラヤの諸教会は、「割礼と戒律遵守」によってユダヤ教＝ユダヤ人共同体に完全に受け入れられた「改宗者」となる前の異邦人らを、ただ洗礼によって共同体に組み入れることで、形成されていた(ガラ 3:26~29)。しかし、彼らは、ユダヤ教を

知らずにキリスト者の共同体に加わったわけではなかったの、ユダヤ教主流派の教えに対して、必ずしも拒絶する理由を持たなかったのであろう。キリスト者共同体が、まだユダヤ人共同体の「分派」として自他ともに認識されていた時期であり、「割礼と戒律遵守」によってユダヤ人共同体に完全に受け入れてもらうことに意義を見いだした者もいたはずである。パウロは、このような立場を取ることを優柔不断と見て、厳しく断じているのである。

・パウロは、生来のユダヤ人が「割礼と戒律遵守」によって「ユダヤ人らしく」生きることを否定していない。彼が問題の所在としたのは、異邦人として生まれた者の救いであり、「ユダヤ人らしく」あることと救いとは無関係であるという原則を、いかなる仕方でも捻じ曲げることに反対しているのである。もっとも、パウロは、洗礼によってキリストと結ばれることで救われた者は、キリストの教える「愛の律法」に基づいて「キリスト者らしく」あることを目標とすべきと考えている。パウロの「異邦人とユダヤ人」の救いの問題は、本書簡では、必ずしも論理的な整合性を確立しているとは言えず、「ローマの信徒への手紙」での論を見る必要がある。

### 福音書日課(マルコ 8 章より)

・日課箇所は、二つの「パンの奇跡の出来事」の後に、その意味を弟子たちが理解したかどうかという問題設定の中で描かれる教えの逸話である。端的に「パンの奇跡の出来事」の意味を謎解きの示す主イエスの教えが伝えられている。

・「パンの奇跡の出来事」は、四福音書が共通に伝える数少ない逸話の一つであるが、「マルコ」と「マタイ」はこれを、二通りで伝えている。すなわち「五千人の食事」の逸話と「四千人の食事」の逸話である。そして、この二つの逸話を必要な重複として敢えて示し、その意味を明示しようとするのが日課箇所であり、「マルコ」と「マタイ」がこれを伝えている。この二つの逸話は、それぞれ、イスラエルについてと異邦人についての象徴的な意味を与えられるものとして示されている、というのが日課箇所の告げることである。すなわち、「五千人の食事」で「五つのパン」が分けられて残ったパン屑が「十二籠」であったというのは、「イスラエル十二部族」の回復を意味し、「四千人の食事」で「七つのパン」が分けられて残ったパン屑が「七籠」であったというのは、聖書で異邦人を象徴する「七つの民」(申命記 7:1 など)の回復を意味する、と説明される。

・この逸話で、主イエスの教えの冒頭では、「ファリサイ派のパン種とヘロデのパン種」への警告がされている。「ファリサイ派の主張」や「ヘロデ王家のプロパガンダ」に対する警告と解されるが、具体的な内容は明示されていない。「ファリサイ派的ユダヤ主義」や「ヘロデ王朝のユダヤ人国家主義」に対して、主イエスが否定的な立場を取られたということなのだろう。

### 来週の誕生日 (7月17日~23日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-2 番「聖なるみ神は」(= I 18)は、17 世紀ドイツ最大の讃美歌作曲家 J. クリュウガーが作曲した曲に合わせて、20 世紀日本の礼拝学・讃美歌界をリードした由木康が自ら編纂に携わった 1931 年版『讃美歌』のために新たに作詞した讃美歌。
- ・21-56 番「主よ、いのちのパンをさき」(= I 187 番「主よ、いのちのこぼを」)は、19-20 世紀米国のメソジスト信徒メアリー・ラスベリーの作詞で、夏期セミナーのために「聖書研究の歌」と題して書かれた。曲は、19 世紀米国で讃美歌作曲家として知られた音楽教師シャーウィンが、この歌詞のために作曲。
- ・21-153 番「幸いな人」は、16 世紀ドイツの宗教改革第二世代にあたるルター派牧師ベッカーが、カルヴァン派のジュネーブ詩編歌に対抗して創作したドイツ語詩編歌の一つ。曲は「ベッカー詩編歌」のために 17 世紀ドイツの作曲家シュッツが新たに作曲した。

#### 21-56「主よ、いのちのパンをさき」

#### Break Thou the Bread of Life

1. Break Thou the bread of life, dear Lord, to me, / As Thou didst break the loaves beside the sea; / Beyond the sacred page I seek Thee, Lord; / My spirit pants for Thee, O living Word!
2. Bless Thou the truth, dear Lord, to me, to me, / As Thou didst bless the bread by Galilee; / Then shall all bondage cease, all fetters fall; / And I shall find my peace, my all in all.
3. Thou art the bread of life, O Lord, to me, / Thy holy Word the truth that saveth me; / Give me to eat and live with Thee above; / Teach me to love Thy truth, for Thou art love.
4. Oh, send Thy Spirit, Lord, now unto me, / That He may touch my eyes, and make me see: / Show me the truth concealed within Thy Word, / And in Thy Book revealed I see the Lord.

#### 21-153「幸いな人」

#### Wohl denen, die da wandeln

1. Wohl denen, die da wandeln vor Gott in Heiligkeit, nach seinem Worte handeln und leben allezeit; die recht von Herzen suchen Gott und seine Zeugnis' halten, sind stets bei ihm in Gnad.
2. Von Herzensgrund ich spreche: dir sei Dank allezeit, weil du mich lehrst die Rechte deiner Gerechtigkeit. Die Gnad auch ferner mir gewähr; ich will dein Rechte halten, verlass mich nimmermehr.
3. Mein Herz hängt treu und feste an dem, was dein Wort lehrt. Herr, tu bei mir das Beste, sonst ich zuschanden werd. Wenn du mich leitest, treuer Gott, so kann ich richtig laufen den Weg deiner Gebot.
4. Dein Wort, Herr, nicht vergehet, es bleibt ewiglich, so weit der Himmel gehet, der stets bewegt sich; dein Wahrheit bleibt zu aller Zeit gleichwie der Grund der Erden, durch deine Hand bereit'.